

フィクションと行為—2.5次元から考える

筒井晴香 (Haruka Tsutui)

東京大学 UTCP

「現実とフィクションの相互作用」をテーマとした本ワークショップにおいて、本発表では高田発表において提示された虚構的真理／感情／行為に関する一連の枠組みを踏まえつつ、フィクションをめぐる近年のユニークな動向をいくつか紹介し、そこからフィクションと現実の関係について何が言えるかを論じていく。なお、本発表の一部は筒井 (2015) を下敷きとする予定である。

高田発表では行為者 - 査定者間のメイクビリーブの共有を鍵として虚構的信念／行為の秩序が説明される。この描像は大枠で適切と考えられるが、その上でいくつかのアクチュアルな事例を通して注目したいのは、フィクションと現実の行為者の関係における相互決定性である。

フィクションはしばしば受け手からの間接・直接の影響を受けた変容・拡張を示す。これはとりもなおさず「当該フィクションについて何が共有されるべきメイクビリーブか」自体が曖昧性を持ち、幾分場当たりに変転していきうることを意味する。近年において特徴的な、複数メディア展開を見込む等の理由で戦略的にオープンエンドに作られるタイプのエンターテインメントにおいて、このような側面は顕著だが、より古典的な事例においても同様の側面は見られるだろう。ここには、虚構的信念・行為に関して、厳密な合理性よりもその都度の物語的な説得力に則る、幾分緩やかな性格の秩序を見て取ることができるのではないか。

本発表において注目したい「ミュージカル『テニスの王子様』」に代表される「2.5次元舞台」と呼ばれるジャンルにおいて、フィクションと現実の相互関係は、単に両者が相互に影響し合うということには尽くされない、より複雑な様相を呈する。「2.5次元舞台」という語は漫画・アニメ作品の舞台化の呼称として用いられることが一般的だが、「2.5」の意味はそれに尽きるものではなく、まさにいずれの「次元」にも位置付けがたい独特の場の現出を指し示している。2.5次元舞台においては、俳優がキャラクター「として」舞台の上であり、観客がキャラクター「としての」彼らをまなざすという共犯的な行為を通して、キャラクターがそこにある場が立ち上がる。このとき、舞台作品であるがゆえの時間・空間の共有性は重要なファクターである。他方で、今そこにあるものとして立ち上げられた世界への操作・介入の可能性、舞台の上と客席との境界設定については、おそらく場自体のもつ要請として線引きが為される。

以上を踏まえ、フィクション自体の／フィクション - 現実関係の流動性と境界といった点に光を当てていきたい。

参考文献：

筒井晴香 (2015) 「二・五次元の自律性とキャスト＝キャラクター」 『ユリイカ』 第47巻第5号 (2015年4月臨時増刊号) 『総特集 2.5次元—2次元から立ちあがる新たなエンターテインメント』、pp. 109-117.